

オープンガーデン活動の実態からみた展開と課題

A study on the development and issues of actual conditions of "open garden"

朴惠恩*・野中勝利*

Hyeeun PARK*・Katsutoshi NONAKA*

This study aims to clarify the development and issues of "open garden" activity by examining the activity actually conducted at three locations. For this purpose, we conducted interviews with administrative officers and the representatives of the activity. As a result, from the histories and actual situations of the three sites, we were able to classify open garden activity into three categories related to public administration: "cooperative," "independent" and "dependent." We also found that open garden activity continues to be carried out as a highly flexible hobby by the participants, based on the exchanges among flower enthusiasts. Furthermore, the activity has also been expanded into collaborative interaction with other groups and into tree-planting activities. To continue this open garden activity, it is necessary for the host group to have its participants interact within their group as well as with other groups on a regular basis. It is therefore more important for the administration to provide opportunities to interact with people, rather than simple economic assistance.

Key words: open garden, actual conditions, category, development, issues

オープンガーデン、活動実態、類型、展開、課題

1. はじめに

最近、日本では 1990 年代後半にガーデニングブームから始まった、個人の庭を一般の人に公開するオープンガーデン活動が増加しつつある。この活動は、福祉活動として行われているイギリスのものとは違って、個人の庭に楽しみを加え、一般の人に公開するといった日本独自のオープンガーデン活動として定着してきている。オープンガーデン活動は個人の趣味活動が、地域の街並み景観向上や他地域との交流、花を媒介とした住民のコミュニティ形成に繋がる活動として意義があるといえる。

オープンガーデンに関する研究は、長野県におけるオープンガーデンの実態と観賞者の行動特性に関する研究¹⁾²⁾を始め、兵庫県におけるオープンガーデン参加者の意識調査や行政支援のあり方に関する研究³⁾⁴⁾、オープンガーデンの地域経済への波及効果に関する研究⁵⁾、地域景観や資源の視点から地域性のあるオープンガーデンのデザインを提案した研究⁶⁾、ガーデニング愛好者のまちづくりの支援を明らかにした研究⁷⁾がある。また事例調査を通じてオープンガーデンの意義を明らかにした研究⁸⁾⁹⁾、イギリスのNGS活動の意義と活動継続の特色を考察した研究¹⁰⁾、オープンガーデン実施者の意識構造と評価、またオープンガーデン活動の有効性を明らかにした研究¹¹⁾、ガーデニングブームの実態と分析により都市におけるオープンガーデンの意義と可能性を考察した研究¹²⁾がある。

オープンガーデン活動は、現在全国の 60 ヶ所以上で行われており、そのうち、半数以上が 2002 年から 2006 年の間に活動

が始まっている。これは、ある意味ではオープンガーデンブームであるともいえる。しかしガーデニングブームから始まった活動であるが、ブームという一時的に盛んになる活動として捉えるより、社会的に意義がある活動として展開・継続させるために、幅広いオープンガーデンに関する研究は必要である。

一方、オープンガーデンに関連する既往研究は長野県や兵庫県などの特定先進例にとどまっている。より多様な形態のオープンガーデン活動に関する研究が必要とされる。

そこで本研究では、3 ヶ所のオープンガーデンにおける活動実態を分析することで、オープンガーデン活動の展開や課題を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法及び内容

本研究では、首都圏におけるオープンガーデン活動のうち、3 年以上活動を継続しており、花愛好者たちの趣味活動として行われているところの 3 ヶ所を対象としている。

調査期間は 2007 年 5 月から 6 月にかけて、行政の担当者とオープンガーデン活動の参加代表者へのヒアリング調査を行った。調査内容は以下に示す通りである。

- ① 活動のきっかけ
- ② 活動の参加者数と公開期間
- ③ オープンガーデンのための組織の有無
- ④ 運営資金の確保方法と使用
- ⑤ 広報活動

* 正会員 筑波大学大学院人間総合科学研究科(Comprehensive Human Science, University of Tsukuba)

表-1 3ヶ所のオープンガーデン活動の概要

区分	ながれやま花恋人			深谷花仲間				坂戸オープンガーデン			
位置	千葉県流山市			埼玉県深谷市				埼玉県坂戸市			
開始年度	2005年5月			2004年5月				2004年4月			
参加者数	2005年	2006年	2007年	2004年	2005年	2006年	2007年	2004年	2005年	2006年	2007年
	20人	30人	52人	41人	49人	62人	68人	23人	38人	39人	27人
公開期間	全庭統一公開期間			全庭統一公開期間				全庭統一公開期間			
	2005年	2006年	2007年	2004年	2005年	2006年	2007年	2004年	2005年	2006年	2007年
	10月	5月14～16日	5月13～15日	5月、10月	10月29～30日	4月29～30日、5月19～20日	4月29～30日、5月19～20日	通年			
組織の有無	有			有				無			

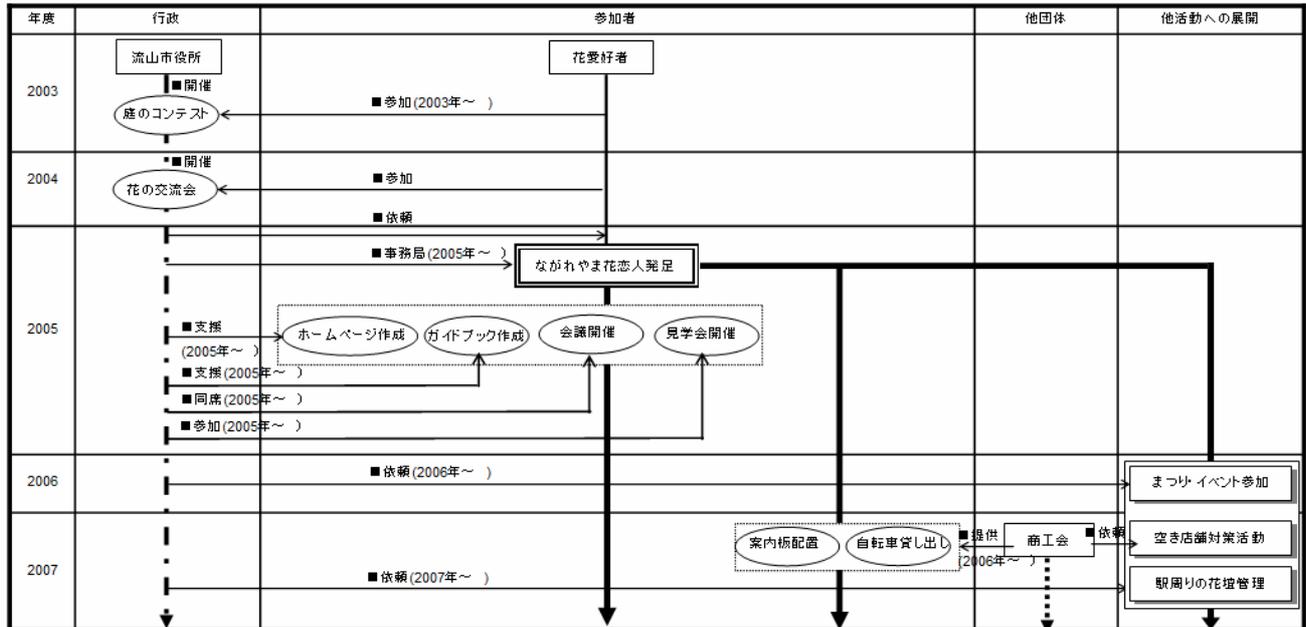


図-1 「ながれやま花恋人」の活動経緯と内容からみた行政と参加者との関係及び展開

表-2 「ながれやま花恋人」の活動内容

区分	活動内容
組織	<ul style="list-style-type: none"> ガーデニングクラブの中でオープンガーデンクラブがある。最初ガーデニングクラブに入会し、オープンガーデンを希望したらオープンする形になっている。 会費：入会する時に一人1000円、その以降は年ごとに1000円 会則：設けており、約15人の役員がいる(会長、副会長、会計、幹事、書記)。 会議：年に4回で、文化会館(無料)で行う。 会議の内容：オープンガーデン公開のことを始め、市民まつりやグリーンフェスティバルなどの活動のこと、花の情報交換をする。
関連活動	<ul style="list-style-type: none"> 見学会：年に1回行い、バスの貸し出しなどの必要な資金は参加者個人負担。行政の個人負担で参加。 空き店舗対策：商店街の空き店舗を利用し、お茶だしや花の情報交換ができる場としている。 駅周りの花壇管理：各地区別の会員が行っている。 まつりやイベント：グリーンフェスティバルという春のイベントの時に、花の絵を作ることで、オープンカフェを開設したり、花を販売したりする。市民まつりの時には、手作り品とガイドブックを販売。
広報活動	<ul style="list-style-type: none"> 行政がホームページの作成や広報に載せる。 市民まつりやグリーンフェスティバルの時にポスターを作るのは会がしている。
運営資金	<ul style="list-style-type: none"> 確保方法：会員の会費+活動収益(市民まつり、グリーンフェスティバル)+協賛金(ガイドブックの広告料) 使用：ガイドブックの製作費+会員たちへの連絡際の通信費

行政と参加者の役割、「他団体との関わり」、「他活動への展開」といった視点から、活動経緯や活動内容を整理・分析し、時系列で図式化した。

(1) ながれやま花恋人

「ながれやま花恋人」における活動経緯と活動の内容・方法を表したのが図-1と表-2である。2003年から庭が多いまちにしたいという市の戦略の一つとして、市が庭のコンテストを開

- ⑥ 公開期間中の来訪者に対する支援
- ⑦ オープンガーデン活動以外の関連活動
- ⑧ オープンガーデン活動の開始当時との違い
- ⑨ 行政と参加者との関係
- ⑩ 効果及び問題

3ヶ所のオープンガーデンの概要を表-1に示す。「ながれやま花恋人」と「深谷花仲間」では年を経るごとに参加者数が増えている一方、「坂戸オープンガーデン」の場合、2004と2005年にかけて参加者数が増加したが、2007年には減少している。公開期間において、「坂戸オープンガーデン」では通年公開している一方で、他の2ヶ所では公開期間を決めて公開している。その中でも、それぞれ庭の見頃の時期や家庭の都合によって公開期間を決めている場合もある。また「ながれやま花恋人」と「深谷花仲間」では、オープンガーデン活動のための参加者間の組織を設けているが、「坂戸オープンガーデン」は組織を設けず、個人個人で活動を行っている。このように3ヶ所の地域において、違う方法で活動を展開していることがわかる。

3. オープンガーデンにおける活動内容

ヒアリング調査により得た回答をもとに、「活動内容における

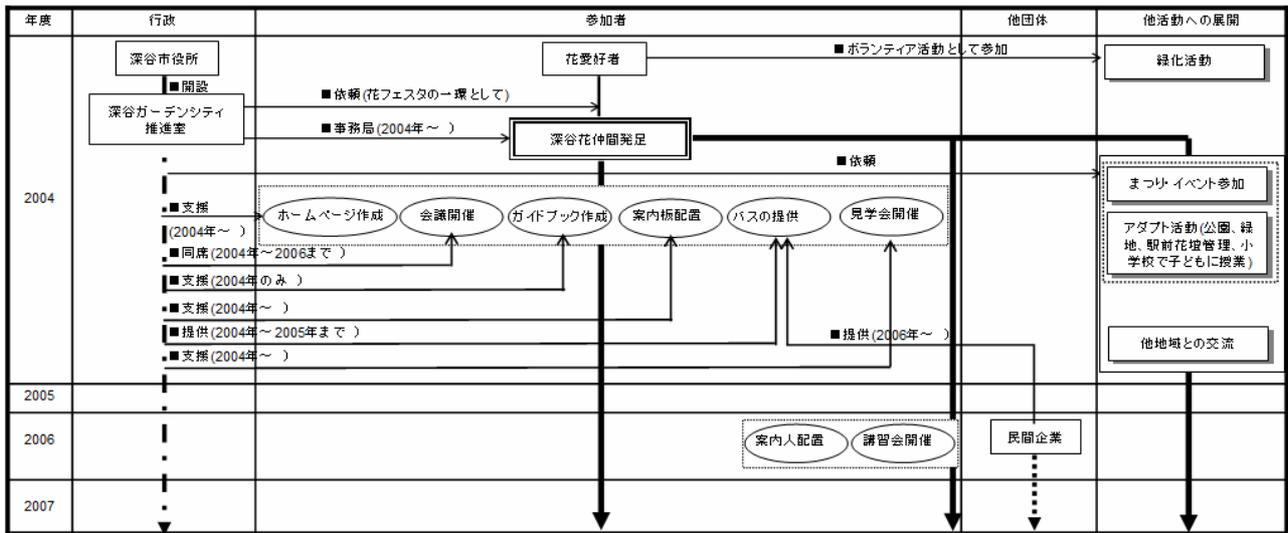


図-2 「深谷花仲間」の活動経緯と内容からみた行政と参加者との関係及び展開

表-3 「深谷花仲間」の活動内容

区分	活動内容
組織	2004年2月にガーデンシティ推進室ができ、3月に会を作り、5月からオープンガーデンを始めた。当時はオープンしなくても、会員になれたが、現在はオープンできるような庭を持っている人が会員になれるようにしている。 ・会費：入会するとき一人で1000円、その以降は年ごとに1000円 ・会則：設けており、17人の役員がいる(顧問、代表、副代表、会計、幹事、会計幹事、アダプト(活動委員)、ホームページ管理) ・会議：月1回の定例会、オープンガーデンの時期には回数を増やす。場所は公民館で行うが、電気代や部屋代は無料(最初は行政も同席したが、現在はしていない) ・会議内容：オープンガーデン公開の事を始め、講習会や研修旅行、花の情報交換をする
関連活動	・見学会：バスの貸し出しは行政。年に2～3回 ・イベント参加：花フェスタの時にガイドブックや花の販売。 ・アダプト活動：行政の依頼で駅前の花壇や公園、道路の管理、小学校で子どもたちに花の授業をしている。 ・講習会：2006年ガイドブックの販売収益がでてから年に3～4回。 ・他地域との交流：隣の地域でオープンガーデン活動をするようになり、組織との交流と共に会員個人との交流があり、オープンガーデンの時に互いに訪問したり、情報交換をしている。
広報活動	・行政が花フェスタの一環として、ホームページの作成、JRのチラシや新聞のチラシへの掲載をしている。 ・梅まつりの時には行政と会員たちが一緒に駅の前でチラシを配ったりする。
運営資金	・確保方法：会員の会費+活動収益(花フェスタイベント参加)+協賛金(ガイドブックの広告料) ・使用：ガイドブックの製作費、懇談会、講習会(講師謝礼)、アダプト活動

け、その応募者たちを中心に行政からの誘いで花の交流会を2004年12月に開催した。その後、行政の依頼と共に、会員たちの希望として2005年5月に人に庭をオープンしようという「ながれやま花恋人」が発足された。そして、行政は他からの連絡受け取りや取材、問い合わせなどの連絡の窓口の事務局役割、ホームページ作成や広報に掲載などの広報活動、またガイドブック作成の際に協賛企業紹介やデザインなどの支援をしている。一方、参加者たちは会議や見学会を開催し、行政は参加という行政と参加者たちの役割分担の協同的な活動のオープンガーデンが2005年から本格的に始まった。

2005年10月に20人から始まったオープンガーデン活動は(表-1)、参加者数の増加に伴い、案内板を配置したり、商工会と連携し自転車を貸し出ししたりなど、公開期間中の来訪者のための支援を積極的に行っている。さらに、2006年からは行政からの依頼でまつりやイベントに参加、2007年からは商工会依頼の空き店舗対策や行政依頼の駅周りの花壇管理など、活動を広げている。

表-2に示してあるように、定期的な会議を通じ、オープンガーデンの事を含め、その他の関連活動の事や情報交換をしており、参加者間の定期的な交流がある。会議の場所は行政が公共施設を無料で開放し、組織の継続的な運営のための支援をしている。また行政や商工会依頼の関連活動の収益と会員の年会費、またガイドブックの協賛広告費を運営資金として確保しており、ガイドブックの製作や会員たちへの連絡のため資金を使用している。運営資金の確保において、行政の直接的な補助はないが、資金の基となるイベントやまつりへの参加依頼、またガイドブックの協賛企業紹介など組織運営に必要な資金確保に協力している。

このようにオープンガーデン参加者たちは「ながれやま花恋人」という組織のもとで、行政の支援を受けつつオープンガーデン活動を含め、地域活動まで展開できる基盤を成している。

(2) 深谷花仲間

「深谷花仲間」における活動経緯と内容を表したのが図-2と表-3である。2004年2月ガーデンシティ推進室ができ、深谷

は花の生産で有名なので、これを活かして花のまちづくりを推進しようということで、花フェスタというイベントの一環として、庭をきれいにしている花愛好者たちに声をかけ、「深谷花仲間」というオープンガーデン組織ができた。この組織の花愛好者たちは以前から周辺の公園管理をしていたし、花好きな人たちと庭をオープンしようという話をしていた。その時、ガーデンシティ推進室の設立に伴い、行政からの依頼を受け、活動を始めるようになった。このように深谷市のオープンガーデン活動は、行政依頼と花愛好者たちとの希望が時期的に一致したことがわかる。

一方、深谷のオープンガーデンはきっかけからわかるように、市の花フェスタというイベントの一環であるため、市からの支援が多い。組織の発足当時からホームページ作成と共に JR や新聞のチラシへの掲載などの広報活動を始め、会議への同席、ガイドブック作成、公開期間中の来訪者のための支援として案内板の配置やバスの提供など、行政の積極的な支援があった。さらに参加者たちの知識習得のための見学会の開催も支援している。しかしこういった行政の支援において、ガイドブック作成は2004年の最初の年のみ、会議の同席は2006年までとなっ

ている。また公開期間中の来訪者のためのバスの提供も 2004年と 2005年の2年間の支援となっている。現在、ガイドブックの作成は「深谷花仲間」の会が、バスの提供は民間企業が提供している。また公開期間中の来訪者のための支援としての案内人の配置や参加者たちの知識習得のための講習会の開催を 2006年から組織が行っている。このように年を経るごとに活動の内容や行政と参加者間の役割に変化がみられる。

さらに表-1の公開期間をみると、2005年までは花フェスタの時に合わせてオープンガーデンをしていたが、2006年からは「深谷花仲間」独自のオープンガーデンを合わせ、年に2回行っている。

また行政の依頼で花フェスタの時に花を販売したり、駅前の花壇や公園、道路の管理、小学校で子どもたちに花の授業を行うなどのアダプト活動と、近所のオープンガーデン活動をしている組織や会員との交流などを行っており、オープンガーデン活動をきっかけとした他の活動への展開を見せている。

2004年に41人から始まったオープンガーデン活動は(表-1)、年を経るごとに参加者数が増加しつつあり、月1回の定例会を通じ、参加者間の親睦や活動の情報交換をしている(表-3)。また活動当初から参加者たちの知識情報習得のための活動として、見学会を行政が支援しているが、2006年からは組織が講習会を行うなど、参加者たちが積極的に活動に参加している。行政依頼のイベント参加による活動収益や会員の年会費、ガイドブックの協賛金などで運営資金を確保しており、ガイドブック製作や懇談会、講習会、アダプト活動などに資金を使用している。

このように活動内容における役割の変化から、深谷オープンガーデンは、最初、市のイベントの一環として行政との協同活動から、「深谷花仲間」という花愛好者たちの独自の活動へ移行しているといえる。

(3) 坂戸オープンガーデン

2002年9月に坂戸市の「花いっぱい事業推進検討プロジェクト・チーム」により坂戸市の鶴舞団地をモデル地区とした「坂戸鶴舞オープンガーデン」が提案された。2003年4月に花の推進室が設置され、花のまちづくりを推進していく中で、オープンガーデン事業の計画が埼玉県より注目され、「彩の国づくり推進特別事業補助金」の助成金を受けることができた。2004年3月に、以前から行われていた「花いっぱいコンクール」の応募者や市民花壇ボランティアに声をかけ、視察研修を実施した。これがNHKで放送されることがきっかけに2004年4月15日から通年公開という「坂戸オープンガーデン」活動が始まった。

坂戸のオープンガーデンの場合、組織を設けず個人個人で活動を行っており、行政は他

からの連絡受け取りの事務局役割、ホームページの作成や見学会開催、またガイドブック作成など活動の運営総括を行っている。さらに参加者たちに年間6000円の水道代としての謝礼をしている。

表-4に示すように、組織の設置に関して、行政は組織を設け参加者たちが運営してほしいという考えである一方、参加者たちは組織を設けた際のオープンガーデン活動以外の活動に対する負担を感じており、オープンガーデン活動を個人の趣味活動として継続したいという考えである。また参加者たちの知識情報習得のため、見学会を行政が企画・開催しているが、開始時には年に2回行ったのが、2006年からは1回となっている。参加者のうち、緑化活動のボランティア活動を通じ、参加者間の交流を設けている場合もある。しかし組織を設けていないため、参加者間の定期的な交流の機会がないということから、見学会は唯一参加者たちの交流の場、または機会であるといえる。見学会の回数が減ったことは参加者間の交流の機会が減ったことを意味する。見学会の回数に関しては、活動のきっかけからわかるように開始時には県からの助成金があったのが、現在は助成金がないということが背後にあると考えられる。

このように「坂戸オープンガーデン」は参加者の中でボランティア活動としてのまちの緑化活動を行っているが、行政の総

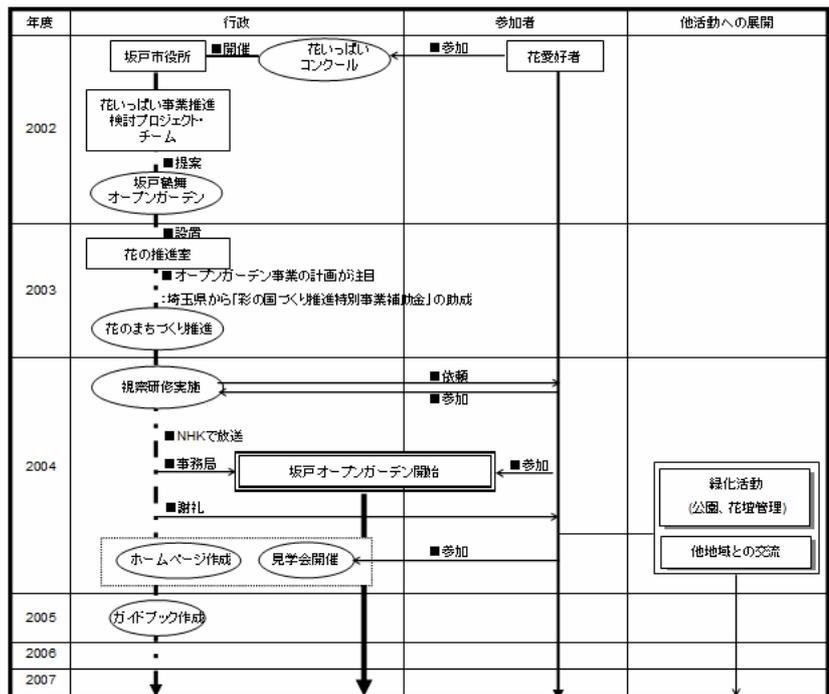


図-3 「坂戸オープンガーデン」の活動経緯と内容からみた行政と参加者との関係及び展開

表-4 「坂戸オープンガーデン」の活動内容

区分	活動内容
組織	<ul style="list-style-type: none"> 設けていない。 行政側：会を作って、参加者たちが運営してほしい。 参加代表者：会の必要性を参加者たちが感じない。オープンガーデンは個人の趣味でしているし、個々の好みが違う。会を作ると、強制になってしまい、負担を感じてしまう。またオープンガーデン活動以外の活動の依頼も受けなければならない。
関連活動	<ul style="list-style-type: none"> 見学会：開始当時は年に2回行ったが、2006年からは1回。行政の企画・負担で、参加者は2000円負担する。 緑化活動：オープンガーデン活動参加者の中で約20人が公園や花の管理、花壇管理などのボランティア活動をしている。
広報活動	行政がチラシやホームページ作成をしており、広報に月に一人ずつ個人の庭を紹介するなどの広告をしている。
運営資金	<ul style="list-style-type: none"> 確保方法：行政負担、年間庭の水道使用量として一世帯に6000円行政が支給。 使用：ガイドブック製作、見学会(参加者2000円負担)

括運営のもとで、参加者たちは趣味として活動を行っている。

4. オープンガーデン活動実態からみた展開と課題

3ヶ所のオープンガーデン活動における活動経緯や活動内容の実態から活動の類型化ができた(図-4)。

まず、「ながれやま花恋人」の場合、開始当時から行政と参加者との役割分担の協同活動であった。さらに年を経るごとに行政の協力と参加者たちの活動の動きが大きくなり、商工会の他の団体との連携活動で、活動の範囲が大きくなってきている。また「深谷花仲間」の場合、開始当時は花フェスタの一環として行政の支援が多かった。しかしオープンガーデン活動以外の関連活動に展開を見せている中で、行政の支援は少なくなっている一方、民間企業との連携と共に参加者たちの活動が大きくなり、行政から独立という「深谷花仲間」の独自の活動として移行している。「坂戸オープンガーデン」の場合、開始当時から行政の花いっぱい事業の一つとして行われ、行政支援のもとで活動していたのが現在も継続している。一方、行政は組織を設け、参加者たちの独立した活動を希望しているが、参加者たちの要望で行政への依存活動のままとなっている。

このように3ヶ所のオープンガーデンはそれぞれ違う類型としてみる事ができる。この3つの類型におけるオープンガーデンの課題を表したのが表-5である。

行政と参加者との関係において、「坂戸オープンガーデン」では参加者たちに謝礼をしているが、この部分に関して参加者たちは責任を感じ維持管理をするようになるということと、より多い謝礼は負担になるということの2つの考えを表している。一方、行政からの謝礼のない2ヶ所のオープンガーデンの場合、謝礼があると強制になるという負担を感じていた。

参加者の行政への期待として、「ながれやま花恋人」と「深谷花仲間」の場合、公開期間中の来訪者のための支援としてトイレの設置のハード面における支援を求めている。さらにソフト面として、「ながれやま花恋人」は他地域の人のつながりの役割を期待しており、行政と参加者との役割分担の協同活動である共に活動の広がりを望んでいることがわかる。しかし行政は参加者に対し、より活発な活動として参加者たちの独自の活動を望んでいる。「深谷花仲間」では参加者たちのオープンガーデン活動のPRという、行政の花フェスタの事業の一環としてではなく、組織活動そのものを重要視している。また「坂戸オープンガーデン」の場合、視察の時期変更や花仲間との交流を期待するなど、行政に依存している一方、行政は参加者たちが組織を設け参加者たち同士で活動を行うことを望んでいる。

オープンガーデンの効果に関して、まず3ヶ所において活動の地域以外に表れた効果として、他地域の人と交流や他地域でもオープンガーデン活動ができたということが挙げられた。また参加者間のコミュニティの復活や地域内の人及び団体との交流の地域内部における効果も挙げられた。まちなみ景観がよくなったという景観の面における効果も3ヶ所において挙げられた。さらに「ながれやま花恋人」と「深谷花仲間」では、オープンガーデン活動をきっかけに他の関連した活動まで展開ができ活動の動きが大きくなったという効果があった。

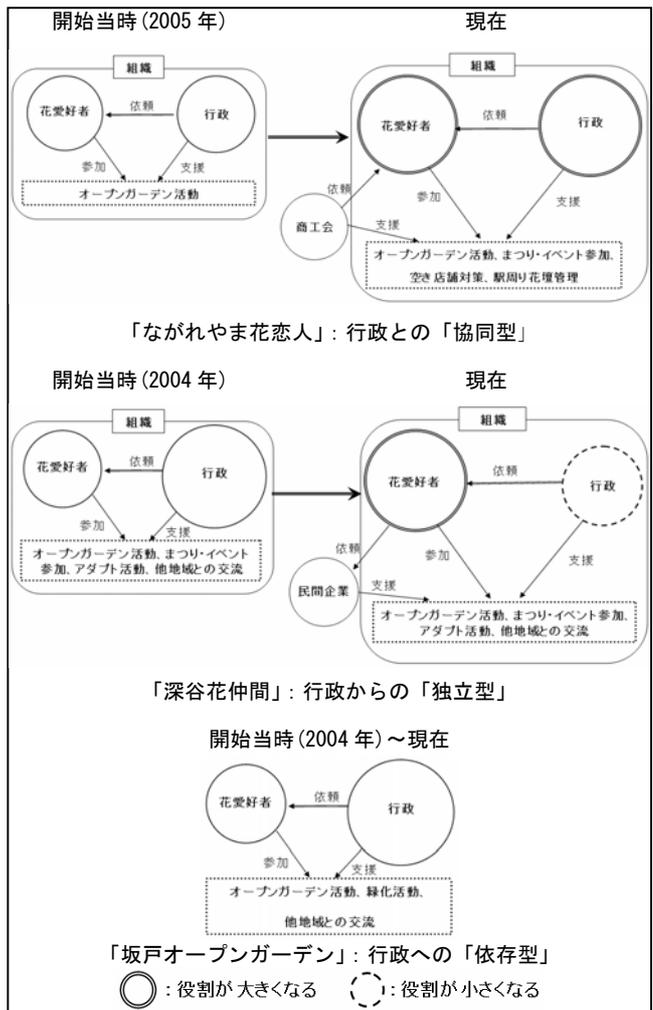


図-4 3ヶ所のオープンガーデン活動における類型化

活動をする際の問題として、駐車場の問題を始め、「深谷花仲間」では花フェスタの一環として行われているため、来訪者とのコミュニケーションができなくなるということと、「坂戸オープンガーデン」の場合、参加者が増えない、またオープンガーデン事業そのものに着眼しており、花仲間同士の交流がないという行政に対する不満が挙げられた。

このように3ヶ所のオープンガーデン活動において、行政と参加者との関係や活動の効果と問題に対する共通点と相違点が表れた。

5. 結論と考察

本研究で取り上げた3ヶ所のオープンガーデン活動は活動経緯と活動内容によって、類型に違いがみられそれぞれ課題も持っていることがわかった。

「ながれやま花恋人」では最初から行政の依頼で始まった活動であったため、行政協力を基に地域内外における人や団体との交流活動へ展開をみせている。しかし表-5の行政の参加者に対する期待からわかるように、参加者たちの独自の活動を望んでいる。そのため、行政支援がなくなった際の対処として、参加者間はもちろん他団体との定期的な交流を設け、参加者たちの知識情報習得と共に来訪者たちへの支援ができるように基盤を成すことが求められる。

「深谷花仲間」の場合、行政からの依頼を受ける以前から花愛

表-5 3ヶ所のオープンガーデンにおける活動類型別の課題

	ながれやま花恋人：行政との協同型	深谷花仲間：行政からの独立型	坂戸オープンガーデン：行政への依存型
行政と参加者との関係	謝礼 望んでいない。地区ごとに活動をしているのが違うので、資金補助があると自由性がなくなってしまい強制がでてしまう。	最初は謝礼がほしいという会員がいて不満をもってやめたりした。行政から謝礼があると、強制になってしまうので、望んでいない。	年間 6000 円の謝礼があるため、責任をもって、維持・管理をする人もいる。むしろ、謝礼を多くもらうと負担を感じるので今の謝礼で不満はない。
	行政への期待 ・ソフト面 ：他地域の行政との関わりや市民と企業とのつながり役割 ・ハード面 ：オープンガーデンの時に来訪者のために表示整備やトイレ設置してほしい	・ソフト面 来訪者を多くするための広告ではなく、オープンガーデン活動をしている参加者たちの庭を公報で紹介するなど会の活動の PR ・ハード面 ：来訪者のためのトイレを設置してほしい。	・ソフト面 ：視察を花の時期に行ってほしい(現在、2月または秋に行っている)。視察ではなくても、花好きな人同士の交流ができるようにしてほしい(オープンする人のみならず、花が好きな人との交流をしたい)。
	参加者への期待 ・事務運営を参加者たちが担当してほしい。 ・参加者たちがより活発に活動してほしい。 ・参加者たちの交流の機会を参加者たちが行ってほしい。	今のままで充分である。	・見学会や講習会を参加者たちが開催してほしい。 ・組織を設け、参加者たちがより活発に活動してほしい。 ・参加者たちの交流の機会を参加者たちが行ってほしい。
効果	外部的 来訪者とのハガキや手紙などの交換をしている。他地域から見学があり、オープンガーデン活動をするようになった。	他地域からの見学が多くなり、交流ができた。	坂戸オープンガーデンは首都圏で最初という坂戸市の PR ができ、市の存在が知られるようになった。他地域からの見学に来て、オープンガーデン活動をするようになった。
	内部的 ・内部での交流 ：市全体を知ることになった(商工会、流山街並み会などの市民団体との交流) ・活動の動き ：オープンガーデン以外の関連活動の参加による住民たちの動きが大きくなった。 ・景観の面 ：まちなみ景観が良くなった。	・内部での交流 ：参加者間のコミュニティが復活した。民間企業も参加するようになり、他団体との交流ができた。 ・活動の動き ：オープンガーデン以外の関連活動に参加が多くなった。 ・景観の面 ：まちなみ景観が良くなった。	・内部での交流 ：参加者間のコミュニティが活発になった。地域内の人との交流ができた。 ・景観の面 ：まちなみ景観が良くなった。
問題	・駐車場の確保が難しい。	・駐車場の確保が難しい。 ・花フェスタと一緒に公開する時には、一日で 3000 人が来るようになってしまい、来訪者とのコミュニティができなくなる。 ・会員が多くなったことによって通信料を請求する会員がいる。	・行政はオープンガーデン事業そのものに着目している。花好きな人との交流ができるようにしてほしい。 ・参加者が増えない。

好者たちの希望があった。そのため、最初は行政のイベントの一環として行ってきたが、「深谷花仲間」組織の独自の活動への展開がみられる。組織活動の PR への要望や、イベントの時には来訪者とのコミュニケーションができないため、イベントの時以外にもう一回オープンするというのがそれを反映している。開始当時より行政の支援が少なくなり、民間企業の参加や参加者たちの活動が大きくなるなど、活動主体の役割に変化がみられる。このような状況で、活動を継続するためには、参加者間の継続的な交流を設け参加者たちの意見収斂、他団体との交流が求められる。

また「坂戸オープンガーデン」の場合、埼玉県から助成金を受け、開始当時から行政からの依頼・支援のもとで活動が行われていた。参加者たちは趣味として活動をしているものの、花好きな人との交流を望んでいる。現在参加者たちの形式的な交流がない中で、行政は事業の一つとしてではなく、参加者たちが楽しみながら継続的に活動をするような機会を与える必要がある。その方法として、花を楽しむことに他の人に見せる楽しみを付加したオープンガーデン活動の魅力が感じられるように、花仲間同士の交流を設けることが考えられる。

このように 3ヶ所のオープンガーデンにおける課題が明らかになったが、その結果から次のことがわかる。

オープンガーデン活動は、地域の宣伝やまちづくりへのつながりの手段として行政が支援しているが、参加者たちは花好きという趣味活動の一つとして自由性を重要視している。また参加者だけの楽しみではなく、他の人に見せる楽しみをオープンガーデンの魅力として認識しており、花仲間との交流に対する希望が大きい。そして、花仲間同士の活動として緑化・美化活動や来訪者たちへの支援活動に対する地域の他団体との連携活

動までの展開を見せている場合もある。このようなオープンガーデン活動を継続させるため、行政は資金補助という面ではなく、人との交流機会や他団体紹介による連携ができるよう仲介役割を担当し、参加者たちが楽しみながら活動を続けられるようにすることが求められる。

- 1) 野中勝利(2002)「長野県小布施町におけるオープンガーデンの特徴と課題」ランドスケープ研究 Vol. 65No. 5, pp805-808
- 2) 野中勝利(2005)「日常的公開のオープンガーデンにおける観賞者の行動特性」都市計画論文集 No. 40-3 pp847-852
- 3) 岩朝英恵、上甫昭春(2007)「兵庫県三田市におけるオープンガーデンの活動と会員の意識・行動の変化に関する研究」ランドスケープ研究 Vol. 70No. 5, pp657-662
- 4) 平田富士男(2004)「オープンガーデン活動に対する行政支援のあり方に関する研究」—兵庫県における活動実施者のニーズ分析から— 環境情報科学論文集 No. 18, pp89-94
- 5) 平田富士男、橋俊光、望月明(2003)「わが国におけるオープンガーデンの地域経済への波及効果量の把握に関する研究」ランドスケープ研究 Vol. 66No. 5, pp779-782
- 6) 峰松祐子、沈悦、斉藤庸平、望月昭、平田富士男、林まゆみ「オープンガーデンの地域性を探る」—淡路地域におけるガーデンデザイン提案— 景観園芸研究 No. 4, pp15-18
- 7) 林まゆみ、塩谷元宏、芮京祿(2000)「ガーデニング愛好者にみられる緑豊かなまちづくりへの活動とその促進要因」環境情報科学論文集 No. 14, pp85-90
- 8) Akita AIDA, Tsutomu HATTORI, Isoya SHINJI(2000) : Aspect of Private Gardens Open to the Public under the National Garden Scheme in England and Wales : Journal of The Japanese Institute of Landscape Architecture, International Edition No. 1, pp9-12
- 9) 相田明、進士五十八(2001)「先駆的事例を通じた我が国におけるオープンガーデンの意義」 東京農大農学集報, 46(3), pp154-165
- 10) 相田明、鈴木誠、進士五十八(2002)「英国ナショナル・ガーデン・スキームによるオープンガーデンの発祥と活動」ランドスケープ研究 Vol. 65No. 5, pp393-396
- 11) 三分一淳、湯沢昭、熊野稔(2007)「オープンガーデン実施者の開放性に関する意識構造の検討」ランドスケープ研究 Vol. 70No. 5, pp391-396
- 12) Katsutoshi NONAKA(2000) : Potential and Development of Garden City : Journal of The Japanese Institute of Landscape Architecture, International Edition No. 1, pp17-20